跡見学園女子大学国文学科報　第二十九号（平成十三年三月十八日）

御局「桐壺」考

植田恭代

一、更衣の御局

「いづれの御時にか」というあまりにも有名な出だしで始まる『源氏物語』。その冒頭の一巻が「桐壺」と呼ばれるのは、光源氏前史と位置づけられる始発の悲恋物語による。その中心人物である帝や更衣は「桐壺」と呼ばれ、同時にまた、さりげなくはさまれる一文によって知られる局の呼称も、「桐壺」であった。

御局は桐壺なり。[1]　　桐壺　二〇

時に冗長とさえ言われるこの物語の文章に、ふとはさみこまれる簡潔な短文は、それゆえかえって際だち、読み手の心に深く刻印される。「桐壺」という空間こそが、物語の焦点となってゆくのである。この「御局は」を「御さうしは」とする本文もあるが、[2]「桐壺」に異同はみられない。『岷江入楚』はこの部分について、「桐壺は御とのよりうしとらのすみにあたる　その間に弘徽殿麗景殿宣耀殿などのめだうをへてとをる也」という。丑寅といえば鬼門のイメージであるが、物語が更衣の御局を「桐壺」と明記するのは、何より、続く一文のリアリティーを、揺るぎないものとして印象づけるためにほかならない。

あまたの御方々を過ぎさせたまひてひまなき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふもげにことわりと見えたり。

桐壺　二〇

多くは『大内裏図考証』あたりに基づいているらしい、辞書や注釈書類の末尾などに掲載される内裏図をみれば、一目瞭然であるように、後宮の東北の角に位置する局が、「淑景舎」である。後宮五舎のひとつで、庭に桐の木を植えたところから、その別称は「桐壺」となる。『和名抄』には「淑景舎　岐利豆保」とある。帝の在住する清涼殿から遠く、その間には女御や他の更衣

たちの局が多々あるという条件ゆえ、帝がお出ましになるにしても、更衣が参上するにつけても、見守る女性たちの心情を逆撫でしてしまう。もし、更衣が弘徽殿あたりに局を賜ることができるのなら、このような物語の展開は生まれるはずもない。しかし、按察大納言の父はすでに亡く拠り所ない身であるため、政界で十分に勢力を奮える現職大臣クラスの父親を持つ女御たちのような割り当てにはならなかった、とするのが物語の言い分である。「桐壺」つまり淑景舎という殿舎は、女御たちが睨みをきかせ、同等もしくはより身分の低い更衣たちのさらなる反感の募るなか、「いとやむごとなき際にはあらぬがすぐれてときめきたまふ」と紹介される更衣の、分不相応の寵愛を際だたせる局として設定され、実際、更衣を悲劇的な死に追いやる大きな要因となっているのである。

しかし、『源氏物語』において、この「桐壺」の悲劇的なイメージは、その後もずっと続いているわけではない。光源氏は私邸として母更衣の里邸である二条院を伝領するが、宮中においても「桐壺」を宮中参内時の私的な場として使用しており、のちに春宮女御として入内する明石姫君の御局となったのも、また、この「桐壺」なのであった。「桐壺」は、物語始発に位置する巻の知名度から、更衣の悲劇のイメージをかぶせられがちであるが、決してそればかりではないのである。

物語の大前提のようにある「桐壺」という御局は、どのような場であったのか。桐壺巻をめぐる研究の隆盛に比して、「桐壺」そのものに正面から向かいあう考察はあまり多くはないように見受けられる。[3] この殿舎について、いま一度物語を詳細にたどりつつ考え直してみるのが、本稿の試みである。

二、「御宿直所」として

桐壺更衣亡き後の「桐壺」は、どのように描かれているのか、それをまず確認することから始めたい。

光源氏が成長し元服を済ませた桐壺巻末には、「淑景舎」という呼称で、その後の「桐壺」の様子が伝えられる。

内裏には、もとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々まかで散らずさぶらはせたまふ。　桐壺　五〇

あの「桐壺」は光源氏の「御曹司」つまり宮中参内時の私的な空間となり、亡き更衣ゆかりの人々はいまだそこに集っているという。この一文に続いて「里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨下りて、二なう改め造らせたまふ」と、母の里邸である二条院改造の様が語られ、光源氏はこのような所に「思ふやうならむ人を据ゑて住まばや」と思う。「桐壺」は本格的に光源氏の物語が始動するにあたり、将来有望な一賜姓源氏の、宮中におけるかなり自在な拠り所として、私邸二条院とともに位置づけられているようである。そこで「桐壺」ではなく「淑景舎」と呼びかえられているのは、この巻の前半を占める更衣のイメージを遠ざけようとするせいであろうか。光源氏は、宮中にも自由になる空間の所有権を得ていることになる。

物語中において、実際「桐壺」は、光源氏参内時の足場として活用されていたようである。

桐壺には、人々多くさぶらひて、おどろきたるもあれば、かかるを、「さもたゆみなき御忍び歩きかな」とつきしろひつつ、そら寝をぞしあへる。　花宴　三五八

花宴の余韻漂うなか、光源氏が朧月夜と出会った直後に、事情を察した周辺の女房たちが光源氏の忍び歩きを噂しあう場面である。ここでは「桐壺」の呼称が用いられており、「人々」とあるのは、前からの流れを考慮すれば、母御息所のゆかりの人々中心と考えるのが自然であろうか。もちろん、光源氏づきの女房は出入り可能であったはずである。もっとも、この場面は花宴という行事のあった晴れの日のことであるから、集まっている女房たちも、いつもより多めであった可能性はあろう。光源氏をとりまく女房たちが「桐壺」に大勢詰めており、だからこそ帰らぬ光源氏が話題となる。「桐壺」は、光源氏が帰ってきて然るべき場所として想定されているのである。引用部に続いて語られるのは、「入りたまひて臥したまへれど、寝入られず」と、朧月夜に逢った興奮さめやらぬまま、なかなかまどろめぬ光源氏の姿である。宴果ててのち、光源氏は直接二条院へ退出するのではなく、「淑景舎」に下がる段取りであったことがわかる。

こうして考えてみれば、桐壺巻の次に位置する帚木巻で「御宿直所」とあったことが想起される。あの雨夜の品定めの段の語り出しである。

長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌さしつづきて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなく恨めしく思したれど、よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調じ出でたまひつつ、御むすこの君たち、ただこの御宿直所の宮仕をつとめたまふ。　帚木　五四

ここで女性談義の場となっている「御宿直所」とは、どこであろうか。桐壺巻末を念頭におくならば、やはり、まず淑景舎に思い当たる。「御宿直所」を淑景舎とする解釈は古注釈の段階ですでに示されており、『花鳥余情』に「御とのゐ所とは源氏の君の御さうしきりつほをいふ也」とあり、『岷江入楚』も「源の御とのゐ所きりつほ也」と同様の指摘をする。それは、現代の諸注釈にも受け継がれ、玉上琢彌『源氏物語評釈』や日本古典文学大系（岩波書店）を経て、新日本古典文学大系（岩波書店）が「源氏のいるほうの宿直所。淑景舎（桐壺）の曹司か」とし、新日本古典文学全集（小学館）でも「源氏の宮中での私室」と注して桐壺巻末の一文を参照させている。雨夜の品定めの場所となった「御宿直所」は、ほんの少し前の桐壺巻末の記述からすれば、おのずと「桐壺」とみなせるのである。桐壺巻末と花宴の用例を合わせて考えるならば、母更衣の縁で特権的に得られた私的空間は、宿直所としても使用されていたことになる。

すぐあとに、もう一度「御宿直所」と繰り返される。

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上に

もをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて書どもなど見たまふ。

帚木　五五

『源氏物語』中、「御宿直所」もしくは「宿直所」の用例は全十四例である。そのうち、光源氏にかかわるものは七例にのぼり、いずれも「桐壺」をさすとみられ[4]、「桐壺」は帚木巻ののちも宿直所になり続ける空間であったことが確認できる。さらに、なおかつ「御宿直所」とともに使われている「淑景舎」の例を、二例見出せるのである。

ひとつは、須磨流謫・明石滞在を経た光源氏が、ふたたび都に召還された場面である。世の情勢も変わり、光源氏が改めて栄華の道を邁進してゆくにあたり、宿直所も紹介し直される。

この大臣の御宿直所は昔の淑景舎なり。梨壺に春宮おはしませば、近隣りの御心寄せに、何ごとも聞こえ通ひて、宮をも後見たてまつりたまふ。　澪標　三〇〇

宿直所には、かつて自在に使えた「淑景舎」がふたたび当てられる。「昔の」とあるところから、光源氏が不遇に陥る以前の、あの華やかな時代に得ていた「淑景舎」という印象を濃厚にする。右大臣方に政権が移っていた間の「淑景舎」の様子は描かれず、御代がわりをし光源氏方により確かな政権が戻ってきたこの時を迎えて、「昔の淑景舎」と「桐壺」が呼び起こされてくるのである。朱雀帝時代の空白は、逆に光源氏にとっての「淑景舎」の意味を強調していよう。「淑景舎」は、桐壺帝在世時における光源氏の特権的私有空間であり、冷泉帝治世の到来とともに光源氏の自由がとり戻された時、晴れやかな復権に見合うように、ふたたび「宿直所」として、「淑景舎」という空間を所有する自由も甦るのである。

また、新たな物語の展開において、「淑景舎」を復活させる必然性もひときわ高まっている。冷泉帝即位ののち、梨壺に住まう春宮を後見するためにも絶好の場所、それが「淑景舎」なのである。清涼殿から遠くに位置するという条件が、かえってそうした配慮もしやすい環境を提供するのだろうか。物語第二部若菜下巻で、冷泉帝譲位により帝位につく春宮は、朱雀院と承香殿女御との間の皇子であり、その後見をすることは今後の朱雀帝との関係を保証することにもなる。私的な空間でありながら政治的な性格も付与されている場ともみなせよう。栄耀を手中にしていく光源氏を支える要因のひとつとして、「桐壺」は澪標巻以降の物語に向けて設定し直されてもいる。

もっとも、その後の「桐壺」の動向については詳細が知らされるわけではなく、再度、物語世界に浮上してくるのは、明石姫君入内に際してである。

この御方は、昔の御宿直所、淑景舎を改めしつらひて、御参り延びぬるを、宮にも心もとながらせたまへば、四月にと定めさせたまふ。　梅枝　四一四

ここに至り、「御宿直所」じたいが「昔の」をかぶせられる過去のものとなる。二月二十日過ぎの春宮元服ののち、いまや周

囲を圧倒する勢いの光源氏の娘の存在に他の姫君たちの入内が遠慮されるのを危惧し、明石姫君の入内は延期され四月となる。他の女性たちを気遣ってあとから入内する娘のために、光源氏は、調度品等も最高のものを整えるべく手配する。「すぐれたる道々の上手どもを召し集めて」「いにしへの上なき際の御手どもの、世に名を残したるたぐひ」と語られる鳴り物入り入内の落ち着き先こそ、「淑景舎」なのである。いまや「桐壺」はかつての悲劇の気配すら感じさせぬ、華やぎの象徴として存在する。

以後、ここに住まう明石姫君の呼称そのものに「桐壺」や「淑景舎」が使われていくことになる。いま、それらを列挙してみる。

①桐壺の御方は、うちはへえまかでたまはず。御暇のありがたければ、心やすくならひたまへる若き御心地に、いと苦しくのみ思したり。夏ごろなやましくしたまふを、とみにもゆるしきこえたまはねば、いとわりなしと思す。めづらしきさまの御心地にぞありける。　若菜上　八六

②「夕方、かの対にはべる人の、淑景舎に対面せんとて出で立つ、そのついでに、近づききこえさせまほしげにものすめるを、ゆるして語らひたまへ。…略…」　若菜上　八七

③挿頭の台は沈の華足、黄金の鳥、銀の枝にゐたる心ばへなど、淑景舎の御あづかりにて、明石の御方のせさせたまへる、ゆゑ深く心ことなり。　若菜上　九四

④年返りぬ。桐壺の御方近づきたまひぬるにより、正月朔日より御修法不断にせさせたまふ。　若菜上　一〇二

⑤寝殿の東面、桐壺は若宮具したてまつりて参りたまひにしころなれば、こなた隠ろへたりけり、遣水などの行きあひはれて、よしあるかかりのほどを尋ねて立ち出づ。　若菜上　一三七

⑥聞こしめしおきて、桐壺の御方より伝へて聞こえさせたまひければ、まゐらせたまへり。　若菜下　一五七

⑦心ばへのかどかどしくけ近くおはする君にて、対面したまふ時々も、こまやかに隔てたる気色なくもてなしたまへれば、大将も、淑景舎などのうとうとしく及びがたげなる御心ざまのあまりなるに、さま異なる御睦びにて、思ひかはしたまへり。　若菜下　一五九

いずれも、若菜上下巻にみえる用例である。右の七例のうち「桐壺の御方」とあるのは①④⑥、「桐壺」とのみあるのが⑤、「淑景舎」は②③⑦である。①では、入内した明石女御を語り手が「桐壺の御方」と呼ぶ。ここで明かされるのは、後宮の暮らしが日常となった姫君の懐妊である。引用部に続き、ようやく帝の許しを得て春の町の寝殿東面に里下がりする姫君に、明石の君がつき添って出入りできるようになったことが語られ、「あらまほしき御宿世なりかし」と評される。一族の栄えを担う姫君なのである。すぐあとに②が見え、③は、紫上薬師仏供養の

精進落としの様子である。④は、女御となった姫君が年改まって出産間近となった場面であり、ほどなく姫君は無事に男皇子を産み、国母となることはほぼ確実となる。その語りだしの呼称は、「桐壺の御方」である。⑤は、柏木女三宮事件の発端となったあの六条院の蹴鞠の場面で、明石女御の不在を語るところ、⑦は、夕霧側が姫君に対する時の様子を語るところで、入内した姫君には気を遣うけれども、玉鬘はまた違う接し方ができると思う夕霧の心が描かれている。

これらの用例にみる「桐壺」と「淑景舎」の使い分けは、「御方」との結びつきやすさ以外はあまり明確ではないにしても、「桐壺」四例と、前述の梅枝巻も含め「淑景舎」四例の計八例が、明石女御に関するものであるのは、注目される。物語における「桐壺」の用例は全八例で[5]、「淑景舎」の場合は桐壺巻末と澪標巻の各一例をあわせて全六例のみである。全体の用例数は少ないながら、その内訳をみるならば「桐壺」「淑景舎」は、明石女御に関するものが、圧倒的に多く、それらは若菜上下巻に集中しているのである。若菜巻では、物語第二部の始発にあたり、第一部の物語を呼び起こし、繰り返される過去によって物語の現在を紡ぎ出していくことが知られているけれども[6]、過去がふたたび登場するだけではなく、明らかな過去と現在との対比構造が看取され[7]、そのなかで、この「桐壺」も出てくるのである。かつて悲劇の要因となった場は、若菜巻のいま、揺るぎない栄華栄耀の場となる。明石女御の将来にわたる繁栄は、華やぐ「桐壺」のイメージを、物語に根づかせる。重ねて用いられる「桐壺」「淑景舎」の呼称は、変容した現在を確実に物語に定着させていくのである。

私たちは通称として光源氏の父帝を桐壺帝と呼び慣わしているが、物語中でそうした呼称がみられるわけではない。母更衣にしても、「桐壺」を冠するのは桐壺巻と須磨巻に一例ずつあるばかりである[8]。『源氏物語』の巻名は当該巻中の和歌に由来することが多いが、桐壺巻の場合は例外である。巻名の「桐壺」さえ、実はあの「御局は桐壺なり」の一文に拠っているのであった。簡潔な短文の衝撃の大きさを確認するとともに、物語内呼称としての「桐壺」は、のちに中宮となる明石女御のそれとして機能していることにも、同等に目を向けてみるべきなのではないか。

「御局は桐壺なり」は、明らかに悲劇の根源としての「桐壺」を語っている。しかし、桐壺巻末で光源氏の所有を示す時点から、すでに「桐壺」「淑景舎」の悲劇性は解消され、澪標巻の政界復帰とともにふたたび物語に呼び起こされ、梅枝巻の明石女御入内以降は、新たに栄華の象徴となり、「桐壺」は存続していくのである。もっとも、その後の「桐壺」の様子がどうであるかは、描かれてはいない。明石女御が中宮となってからはどのようであるのか、匂宮はどうしていたか、などについては明らかにされてはおらず、物語世界の表舞台に「桐壺」「淑景舎」が出てくることもなくなってゆく。光源氏の栄華形成に密着し

た空間として「桐壺」「淑景舎」はある。

物語世界において、「桐壺」は、貴族社会の一員となった光源氏が自由にできる空間として所有された。常に「桐壺」の詳細な情報が開示されているわけではないけれども、物語叙述が随所にみせる「桐壺」「淑景舎」情報は、光源氏の特権ともいうべき権限を想定しつつ読むことを可能にする。不遇の象徴空間を拠点にして栄華を築く。なんとドラマティックなしかけであろうか。物語は、五十四帖をとおして四代の帝の治世を描く。そのなかで、類い稀な資質に恵まれているとは言え、臣籍降下をした光源氏が桐壺帝在世時に自由になる空間を得られ、冷泉帝の時代になるとふたたびその所有権の主張が可能になるという物語の設定は、現実には考えにくいものであろう。むしろ、それを描き続けるのが『源氏物語』とみるべきなのではないか。こうした「桐壺」幻想が生きているように描かれるからこそ、明石姫君は「桐壺」に入り、自分の空間として使い続けるのである。『源氏物語』世界史における負の遺産は、栄耀の拠点となって光輝を放ち続けるという、いわば逆転現象を生み出してゆく。

三、史実のなかの「桐壺」

では、「桐壺」という殿舎は、実際にはどのような場として受けとめられていたのだろうか。少し角度を変えて考えてみる。すでに知られている史料も多いが、いま一度それらをたどり直してみたい。

諸記録には「桐壺」と記される例はなく、すべて「淑景舎」である。まず、醍醐朝あたりには、穢れにふれる記事が散見する。(9)

延喜十年六月一日記云供忌火御飯昨日内膳司申云淑景舎死穢満…略…　『江次第抄』第七

この前には「禁中有穢時猶供之」と記されており、詳細はわからないけれども、淑景舎に死の穢れがありながら内膳司の行事である忌火御飯を行ったという記述である。

淑景舎顛倒。打敦七歳男子云々。仍止仁王経御読経。　『日本紀略』（延喜十五年五月六日）

「淑景舎」の倒壊による七歳の男児の事故死であり、仁王経御読経が中止されている。

また、『小右記』逸文の〔三條西家重書古文書〕には、長元三年二月十五日の条に「外記季通勘申宮中有死穢之時被行大祓例」とあるあとに、「延長七年四月廿七日、丙寅、未一剋許、於淑景舎、書司女孺佐伯有子死去、五月十一日、乙卯、於建礼門、有大祓事、是去月□七日内裏淑景舎嫗頓死」という記述を載せている。この時期、「淑景舎」はしばしば死の穢れに見舞われたようである。ただし、これが「淑景舎」を特徴づけるできごとと断定してよいかどうかについては、さらなる検討の余地があろう。

もちろん、穢ればかりが記されるのではなく、村上朝には虹

の記述もある。

虹立淑景舎北庭。　『日本紀略』（康保三年二月廿四日）

一方で、「淑景舎」はさまざまな催しの場ともなっていたらしい。まず円融朝から。

摂政右大臣於淑景舎有官奏。

『日本紀略』（天禄元年六月八日）

摂政右大臣は藤原伊尹である。伊尹は「淑景舎」で官奏を行っている。「淑景舎」は公務の場として用いられていることになる。また、ここが内宴の場となったことも知られる。

内宴。詩題云。鶯啼宮柳深。於淑景舎有此宴。

『日本紀略』（天禄二年正月廿一日）

内宴の場となった「淑景舎」は、数日後には除目の場にもなったようである。

於淑景舎除目。　『日本紀略』（天禄二年正月廿七日）

「淑景舎」を時の権力者が使い、そこで私用のみならず公務が執り行われているのは、たいへん興味深い。

さらに時代がくだると、人生儀礼の場として使用されている例がみられる。

右大臣息男於淑景舎御前加元服。摂政養子也。授従五位上。有饗宴。弁少納言史等預之。

『日本紀略』（寛和二年十月廿一日）

花山朝から一条朝へと御代がわりしてまもなく、摂政つまり藤原兼家の養子道信が淑景舎で元服の儀を行っている。兼家ほどの人物の養子となれば、元服の場もそれ相当のところが選ばれるはずであり、それが「淑景舎」なのである。さらに、「淑景舎」は、宮中において兼家の所有する空間ともなっていた。

於摂政直廬淑景舎除目始。

『日本紀略』（永祚元年正月廿七日）

ここでは、兼家の直廬すなわち賜った個室である「淑景舎」が、やはり除目の場となっている。直廬は宮中における私的所有空間であるものの、公務のために使用される場でもある。それが、「淑景舎」なのである。

また、帝の滞在場所となった例もみられる。

天皇移御摂政宿所淑景舎。諸卿殿上人有被物禄物等事。

『日本紀略』（正暦二年十二月九日）

前年摂政となった藤原道隆の宿所である「淑景舎」に一条天皇が移御された、という。宿所は直廬とほぼ同義とされ、その「淑景舎」は帝の移御にも見合う場であった、と考えられよう。一条朝前夜あたりから、政権の中心となるような人物たちが「淑景舎」に出入りし、時に所有し、本来私室であったはずのその空間は、公務や公的な性格の強い儀式の場として用いられていたことがうかがえるのである。「淑景舎」は決して虐げられた場所などではなく、むしろ政治にも絡む場所として像を結ぶ。

ここで、「淑景舎」が直廬となった例を、みておこう。

今明内御物忌、於摂政御直廬撰定人々申文、

『小右記』　廣本（永祚元年正月廿六日）

大日本古記録では「御直廬」の横に（淑景舎）と注するが、これは先にみた『日本紀略』永祚元年の記述の前日であり、兼家の直廬となった「淑景舎」であるとみられる。

「淑景舎」が摂政の直廬となったことを示す例はほかにもある。

参摂政御宿所、淑景舎、　『小右記』　廣本（寛仁三年正月五日）

これは、藤原道長の長男頼道の宿所となった淑景舎である。その後、堀河朝にもみえる。

暫候直廬、淑景舎、　『殿暦』（康和二年七月十七日）

戌剋許着直衣参内宿所、梅壺也、今日依吉日渡居也、本宿所淑景舎也、　『殿暦』（康和四年十二月十六日）

やはり直廬である「淑景舎」の例があり、宿所を「淑景舎」から梅壺つまり凝華舎に移した例などもみえている。

こうしてみると、比較的早い時期に突発的な事件などが記されていた「淑景舎」は、一条朝の近づく頃から、しばしば政権の中心に関わる人物たちに使われ、公的な意味あいの強い諸事の場となっていることが、明らかであろう。実際、その後も直廬として使われたことは、うかがえるのである。

もっとも、直廬や宿所が、物語に言われるような「御宿直所」とどう切り結ぶのかについては、いましばらく慎重でありたい。周知のとおり、内裏そのものが、村上朝の頃から頻繁に炎上を繰り返すという災難に見舞われてもいる。[10] 度重なる火災によって、「桐壺」「淑景舎」そのものが変容している可能性も否めない。しかし、みてきたように諸記録が伝える「淑景舎」をとりまく事情は、やはり物語の外側にあるものとして視野に入れておかなければなるまい。

では、「桐壺」と関係の深い女性としてはどのような人物がいたか。「桐壺」を考えるうえで忘れてはならないのは、藤原原子である。[11] 原子は、道隆の二女で母は高階成忠女貴子、定子の同母妹にあたる。『尊卑分脈』に「女子」とあり「三条院坊時御息所」と注されるのが、この原子とみられる。『日本紀略』長徳元年正月十九日の条に「今夜。関白第二女参東宮」とあり、春宮、つまりのちの三条帝に入内したことが記されている。『枕草子』にも、この原子入内に関わる章段がある。

淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など、いかが、めでたからぬことなし。正月十日にまゐりたまひて、御文などはしげう通へど、まだ御対面はなきを、二月十日余日、宮の御方にわたりたまふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心ことにみがきつくろひ、女房など、みな用意したり。

ここでは原子の入内を正月十日とするが、『小右記』では長徳元年正月十九日の条に「関白二娘号内御匣殿今夜参青宮云々」としており、「青宮」は「東宮」と思われ、『日本紀略』の記述と一致する。『枕草子』は原子の入内直後の二月半ば、定子との対面をめぐる華やかな様子を描く。「淑景舎」は、すばらしい女御の呼称ともなる御局である。周知のとおり、その二ヶ月後には

道隆薨去、中の関白家の零落に至るのであり、この章段はその最後の輝きを記したともみなし得る。『栄花物語』は、この原子入内を次のように描く。

中姫君、十四五ばかりにならせたまひぬ。東宮に参らせたてまつりたまふ有様、はなばなとめでたし。さて参らせたまひぬれば、宣耀殿はまかでたまひぬ。淑景舎にぞ住ませたまふ。何ごともただかやうなれば、いはん方なくめでたし。

『栄花物語』巻第四「みはてぬゆめ」

「淑景舎」に住むことになった原子の入内は、大変に華やいでいたらしい。それゆえ宣耀殿女御は退出している。宣耀殿女御は藤原娍子。引用部のあとには、娍子を見慣れた春宮には、原子が「事にふれ今めかしう思さる」とも書かれており、当世風の華やかな印象に彩られた原子の入内であったようである。しかし、原子の人生は、そのまま華やかに展開していったわけではない。『大鏡』には次のように語られている。

さてまた、この宮の御母后の御さしつぎの中の君は、三条院の東宮と申しし折の淑景舎とて、はなやがせたまひしも、父殿うせさせたまひにし後、御年二十二三ばかりにてうせさせたまひにき。

『大鏡』「道隆」伝

『日本紀略』によれば、長徳元年四月六日、道隆の出家にともない、「中宮幷東宮女御行啓彼里第」とあり、原子は定子とともに里邸に退出する。中の関白家没落の時期にあって、原子も後宮で羽振りをきかせるには至らなかったのではないか。結局、原子自身も定子同様早世しており、やはり悲劇の女御と言わねばなるまい。行成は、原子の死を次のように記す。

臨昏為文朝臣来告、淑景舎君於東三條東対御曹司頓滅云々、聞悲無極

『権記』（長保四年八月三日）

原子は頓死であったらしい。それは、世間には奇怪な謎として受けとめられたに違いない。原子の入内に際し、その華やかさを伝えていた『栄花物語』は、一方で娍子との対照性を強調していたが、のちの叙述でも二人を意識的に対比させている。

東宮には宣耀殿のあまたの宮たちおはしまして、御仲らひいと水漏るまじげなれば、淑景舎参りたまふこと難し。

『栄花物語』巻第七「とりべ野」

娍子は、正暦五年に敦明をもうけ、続いて長徳三年敦儀、長保元年に敦平を産み、定子の出産直前にあたる、この『栄花物語』の長保二年時点で、春宮との間にすでに三人の皇子がある。「とりべ野」巻末は、この原子の奇怪な急死で閉じられる。日頃病んでいたわけでもない原子の死のありさまは「御鼻口より血あえさせたまひて、ただにはかにうせたまへるなり」と言われ、物語は「世の中はかなしといふなかにも、めづらかに心憂き御有様なり」と評する。一方、重い病を患っていた娍子は反対に快復したため、世の人は「宣耀殿ただにもあらずしたてまつらせたまへりければ、かくならせたまひぬる」と呪詛の疑いを噂し合ったという。春宮後宮の人間関係への詮索は、世間の不穏な噂を増長させたと思われる。「淑景舎女御」と言われた原

子は[12]、華やいだ入内を伝えられながら定子崩御からほどなく頓死し、後宮での確執が、世間では裏側の妥当な理由として取りざたされていったのであろう。

そもそも、「桐壺」を拠点とした后妃たちはどのくらいいたのだろうか。女御や更衣で「桐壺」を局とした人は、原子が初めてであると言われる[13]。いま角田文衛氏の「歴代后妃表」によれば、入内して「桐壺」と呼ばれた女御更衣は見えず、「淑景舎」とみえるのは、この原子ひとりのみである[14]。一条朝に知られた原子の存在は、「桐壺」を考えるうえで、極めて大きいものなのではなかったか。栄華と悲劇を同時に背負う「淑景舎」のイメージは、原子の存在によって、事実というより噂が先行するかたちで世間に記憶されたはずである。『栄花物語』には原子の歌を載せる。

秋霧の絶え間絶え間を見渡せば旅にただよふ人ぞ悲しき

『栄花物語』巻第五「浦浦の別れ」

これは後世の歌集にも入集されている。『続古今和歌集』には「あきぎりのたえまたえまをながむればそらにうきたる月ぞながるる」（巻第五　秋歌下　四九二　淑景舎女御）とあり、『万代和歌集』では三句以下を「ながむればうきたるくもぞあはれなりける」巻第五　秋歌下　一〇三七　題知らず　淑景舎女御）とする。のちの時代にまでわたり、華麗な入内ゆえの悲劇の女御として、この原子が受けとめられていたことを思わせられるのである。もちろん、物語の空間の意味あいを、諸記録から規定していくことには限界があろうし、物語世界の人物と史実のなかの人物を性急に重ねあわせてしまうことも危険である。しかし、物語の外側に歴然と存在するこうした「桐壺」「淑景舎」事情は、否定することもできない。視野を拡げて複眼的にとらえておく必要がある。史実の方からは、一条朝周辺において、「淑景舎」が政界の要人たちの出入りする公的空間ともなっていること、栄華と悲劇を同時にになう一条朝の春宮女御が「淑景舎」であったことに着目される。「淑景舎」という名称には本来めでたい意味がこめられているはずであり[15]、殿舎じたいが悲劇的な性格をひきずるわけではない。そして、平安中期には政治絡みの私的空間として所有され用いられてもいたのである。光源氏が私的に使える空間として「桐壺」を得ることも、それじたいが現実と乖離しているものではない。それだけに、物語では、光源氏の人生の浮き沈みに見合うように「淑景舎」の所有を描いていることが、特徴として立ちのぼってくるのである。

それでは、悲恋物語の「桐壺」にみるあの翳りはどうとらえたらよいのであろうか。翳りの由来を断定するのは難しく一面的には考えられない。しかし、作り物語の創造であるにしても、栄華と悲劇をになう女御の存在が、「淑景舎」のイメージに翳りをもたらすのに一役かっていた可能性は十分にあろう。後宮の様子を知る周辺の人々に原子の存在は大きく、もし原子がいなければ「淑景舎」のイメージもずいぶん違っていたはずである。

帝から破格の寵愛を受けてときめいていた母更衣が、それゆえ幼い皇子を残して世を去らねばならなかったという展開は、寵愛されて謎の死をとげる原子と、一脈通じてもいよう。もちろんぴたりと重なるというものではない。そもそも『源氏物語』桐壺巻頭では「桐壺」と言い切るのであり、すでにそこから史実との完全な整合性は否定されている。それでも、なお、時代に共有されるイメージの影響力は、決して見過ごせないものなのではないだろうか。

そのうえで、あらためて物語にたちかえれば、こうした「淑景舎」を「桐壺」という別称で語り出し、その悲劇の拠点を、朱雀帝時代の空白を経たのちに、栄華の拠点に転換してゆく、物語のダイナミックなしかけが鮮やかに浮かびあがってくるのである。

四、「桐壺」幻想のゆくえ

それでは『源氏物語』以降の「桐壺」はどうなっていくのか。物語史を詳細にたどり直しての検討は、また機会を改めて試みることとして、いまはさしあたり、目についたことから記しておきたい。

『源氏物語』以降のいわゆる後期物語で「桐壺」が登場するのは、『狭衣物語』である。『狭衣物語』後半、大納言の姫君を母君が兵部卿宮と結婚させたいと願い、叶えられぬ場面に続いて、その兵部卿宮が「桐壺」を賜ることがみられる。

桐壺を、女宮の御しつらひのやうに、めでたくきよらにせさせたまひて、女房など、かたち、心すぐれたる限り、あまた候はせたまひてぞ、おはしまさせたまひける。[16]

「めでたし」に加え、「きよらなり」という最高の美をもって表され、選りすぐりの女房たちが大勢集う「桐壺」には、悲劇のかけらは微塵もない。光源氏のように所有が可能となった「桐壺」は、明石女御のめでたく華やいだイメージに結びついていよう。

現存本『しのびね』の冒頭にある「桐壺」も、また同様な描かれ方とみられる。

殿・上のかなしと思したる御気色、いづれの君達よりもすぐれてかしづき聞こえたまふ。御妹は春宮の女御、桐壺にておはします。とりどりにいとはなやかなる御覚え、やんごとなき御様どもなり。[17]

四位の少将の妹である春宮女御の御在所が「桐壺」という設定である。女御は帝の寵愛も得て勢いづいているわけであり、この「桐壺」も華やぎの場として物語に描かれている。[18]

清涼殿から遠いために悲劇を招くような「桐壺」は、『源氏物語』の「桐壺」巻以降、今に伝わる物語の本文には根づいていかない。描かれるのは、栄華を象徴する場としての「桐壺」である。それも「淑景舎」ではなく、「桐壺」そのままなのである。作り物語の系譜のなかに、光源氏の所有権や明石女御型の栄華を表す「桐壺」が、ひとつの典型的なありかたとして定着

していることが、まず推定されるのである。

一方、和歌の世界では、「桐壺」といえば更衣の悲劇であるらしい。時代のくだった貞治五年の二条良基主催『年中行事歌合』には、内裏殿舎に寄せる恋題八首があり、そのなかにみられる「桐壺」も更衣の悲恋に拠っている。

卅九番　左　寄萩戸恋　　頓阿

七七　物ぞおもふ下葉色づく萩の戸のあくる幾夜かいねがてにして

右　寄桐壺恋　　兼熙

七八　花鳥の色ねにつけておもふにもたぐひなかりし人の面影[19]

判詞には「右、花鳥の色にも音にもと云へる桐つぼの更衣の事にや」とある。作歌の規範として『源氏物語』を絶対視していたはずの人々の間で、「桐壺」が更衣の御局であるのは、考えてみれば当然のこととでもある。

詠歌の題材として桐壺巻が好まれていたらしいことは、他の歌集からも確認できる。

源氏物語のきりつぼのまきの、なほあさまつりごともおこたりぬべかめり、とあるところ　　円覚法師

九〇八みしゆめをやみのうつつにたどりつつなほおきまよふ秋のあさ露

『楢葉和歌集』巻第十二　雑三

更衣への哀傷を描く場面で、悲嘆にくれる帝を念頭においた歌であろう。

内裏にて源氏のまきまきを題にて歌よみ侍りけるに、きりつぼ

四七二すみまさるいけの心にあらはれてもとのこだちのかげもみえけり　　『人家和歌集』巻第十

嘉禎三年成立の素俊法師撰『楢葉和歌集』におさめられた歌は、詞書にあるとおり、桐壺巻を題材として詠まれている。念頭におかれているのは更衣哀傷のようである。十三世紀後半の成立と言われる『人家和歌集』の方も桐壺巻によせての詠歌であるが、これは桐壺巻末の二条院改修のくだりに「もとの木立、山のたたずまひおもしろき所なりけるを、池の心広くしなして、めでたく造りののしる」とあることに基づいていよう。この歌は悲恋そのものを詠むものではないが、『源氏物語』本文でその直前に位置する、光源氏の御曹司となった「淑景舎」は、眼中に入っていなさそうである。撰者である藤原行家は『続古今和歌集』撰者の一人であり、この周辺の人々の間で桐壺巻への意識が高かったことをうかがえる。

さらに、物語和歌を集めた歌集にも「桐壺」がみられる。「桐壺」の語とともに切り出されてくる歌は、帝と更衣の悲恋にまつわるものがほとんどである。まず、『物語二百番歌合』の用例をあげてみる。

＊五十四番　哀傷部

左　きりつぼの宮すどころかくれて秋の月のよ　故院御製

一〇七　くものうへもなみだにくるる秋の月いかですむらむあさぢふのやど

＊五十六番

左　きりつぼの宮すどころかくれてのち、ははのもとにつかはしける　故院御製

一一一　みやぎののつゆふきむすぶかぜのおとにこはぎがもとをおもひこそやれ

（後百番歌合）

＊十六番

左　きりつぼの宮すん所かくれてのち　故院御製

二三一　たづねゆくまぼろしもがなつてにてもたまのありかをそことしるべく

＊五十一番

左　内の御つかひにて、きりつぼの宮すん所の母のもとにまうでてまちおはしますらむといそぎかへるに、月いりがたちかきそらきよく風すずしくふきて、くさむらのむしのこゑごゑもよほしがほなるに　ゆげひの命婦

三〇一　すずむしのこゑのかぎりをつくしても長き夜あかずふるなみだかな

一覧して明らかなように、いずれも、『源氏物語』桐壺巻中の悲恋物語にまつわる歌である。これは『風葉集』の場合でもほぼ同様であり、右の一〇七番歌、一一一番歌、三〇一番歌は、詞書・作者名表記は異なるものの重複する。[20] ここでは、それ以外の用例のみをあげておく。

巻第九　哀傷

やまひおもくなりて、まかでんとしけるに、うへ、さりともうちすててはえゆきやらじとの給はせけるに　源氏のきりつぼの更衣

六五二　かぎりとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

これら物語和歌を題材とする歌集においては、「桐壺」と言えば桐壺巻の更衣の悲劇をさすといってもよいほどなのである。十三世紀後半の成立と推定される『源氏物語歌合』においても、「桐壺」は「きりつぼの御門」だけである。桐壺巻の印象は、こうした後世の享受をとおして、いっそう煮詰められていったことがうかがえよう。なかでも中世和歌の世界の影響力は強そうである。これらの歌集中に、明石女御と結びつく「桐壺」はみられない。また、物語評で知られる『無名草子』の次のようなくだりは、中世の「桐壺」観をうかがううえで興味深い一節

である。

「巻々の中に、いづれか、すぐれて心にしみてめでたくおぼゆる」と言へば、

「『桐壺』に過ぎたる巻やは侍るべき。『いづれの御時にか』とうちはじめたるより源氏初元結のほどまで、言葉続き、有様をはじめ、あはれに悲しきこと、この巻に籠りて侍るぞかし。…略…」[21]

桐壺巻が最高と言わんばかりの口調であり、そこで評価の対象となっているのは、やはり帝と更衣の悲恋物語である。後世の『源氏物語』享受において冒頭巻がいかに印象深く受けとめられていたか、はかりしれない衝撃の強さを想像するべきなのだろう。

さらに付け加えるならば、散逸した物語のなかに「桐壺」「淑景舎」が描かれていたことも、『風葉集』から推定できる。ひとつは『浪のしめゆふ』である。

＊巻第九　哀傷

兵部卿のみこかくれてのちに、夢にみえ侍りければ

なみのしめゆふの淑景舎女御

六九〇夢のうちにみゆるわかれの悲しさもありしうつつにおとりやはする

＊巻第十六　雑一

だいしらず　　浪のしめゆふの淑景舎女御

一二四一いかにして冬のよすがらうちはらふをしの上毛の霜ときえなん

散逸物語のあらすじは、近年重ねられている復原の試みによって、その概要を把握することができる。[22] 平安時代の作であろうと推定される『浪のしめゆふ』の内容としては、帝と淑景舎の女御の間に一宮が誕生すること、早く関係のあった兵部卿宮を追慕することなどが、知られている。[23] その復原資料となる歌に「淑景舎女御」と明記されているのである。『風葉集』によって知られるこの作品の詠者四人全八首のうち「淑景舎女御」とある歌は帝の歌と同様に三首であり、「淑景舎女御」が物語中重要な人物であったのは動かないであろうが、その呼称となる「淑景舎」がどういう空間として彩られていたのかについては、いまだ確かな手がかりは得られていない。今後の検討課題である。

人物呼称に「桐壺」のみられるもうひとつの散逸物語は、『箸鷹』である。

巻第十　賀

三条院御こころとめぬさまにみえさせ給ひければたてまつり侍りける

はしたかのきりつぼの御息所

九七一数ならぬ身をばのきばのささがにのいかにかすべき心ぼそさを

『箸鷹』は鎌倉期の物語に分類されており、その内容は、女院

と呼ばれる女性と三条院との恋物語で、そこに桐壺御息所の出仕も絡むようである。[24]「きりつぼの御息所」を詠者とする歌は、知られる全九首中の一首であり、この「桐壺」の様子についても、現段階では不明と言わざるをえない。これら名のみが伝えられる「桐壺」の、物語における実態が明らかにできれば、物語史における「桐壺」の系譜がより鮮明になってくるのは間違いない。さらなる手がかりに期待したい。

以上みてきたように、『源氏物語』以降の物語では、悲劇の空間としての「桐壺」が継承されていったわけではなく、むしろ光源氏や明石女御にみられたような栄華の「桐壺」が描かれている。かたや『源氏物語』を正典とする和歌世界にみられるように、桐壺巻の御局による「桐壺」信仰の根は深く、「桐壺」は物語冒頭のイメージを色濃く漂わせる名称として享受され続けてゆく。こうした二つの方向を、いまの段階ではおさえておきたい。

まとめにかえて

『源氏物語』冒頭で強調される「桐壺」について、物語の展開をたどりつつ史実にも目を向けて検討してきた。最後に、本稿で明らかになったことをいま一度整理しておく。

まず物語内では、桐壺巻の「御局は桐壺なり」という一文により、「桐壺」が悲劇の場として強調されているが、桐壺巻末に至ると元服した光源氏の宮中における私的な空間として再設定され、冒頭巻の時点においてすでに「桐壺」の据え直しがなされている。その結果、「桐壺」すなわち「淑景舎」は、物語世界で光源氏の自由になる空間として所有されることになる。朱雀帝政権下の空白を経て都に召還された光源氏が、冷泉帝の時代を迎え栄華の道を極めてゆく時、ふたたびかつての自在な空間の所有権を獲得し、新たな物語内情勢にふさわしく活用されていくのである。さらに、若菜巻に至り一族に繁栄をもたらす明石女御の入内が描かれるに際して、女御の入る場所は「桐壺」と定められ、今度は女御の呼称としての「桐壺」「淑景舎」が繰り返し用いられる。物語は、悲劇の要因となった空間を逆手にとるようにその再設定を試み、「桐壺」は栄華の拠点として生き続けることになるのである。

一方、そうした物語世界の外側に、史実としての「淑景舎」「桐壺」はある。一条朝始動の頃には、「淑景舎」に政界の要人たちが出入りをし所有もするようになる。直廬もしくは宿所と宿直所の関係や、それに後宮の殿舎が当てられることの実態やその意味については、さらなる考究の余地があり、史実における「淑景舎」の問題を明らかにするために引き続き検討していかなければならない課題である。また、一条朝の春宮女御となった原子は、直接「桐壺」を冠されて呼ばれてはいないものの、「桐壺」と極めて密接な関係にある稀少な女御として、物語を考えるうえでも注目される。定子の妹としてほぼ同時期に栄華と悲劇を同時に背負う人生を生きた人物であり、その入内先に

よって「淑景舎女御」と呼ばれ、後世にまで名を知られてもいる。

物語をとりまく状況を視野に入れれば、「桐壺」の翳りや宮中における所有の問題など、物語との影響関係が想定されるとともに、だからこそ、悲劇をもたらした負の遺産を逆にいかし、したたかなまでに利用して最終的に栄華の拠点に作りかえてゆく、物語独自の鮮やかなしかけが、浮上してくるのである。

こうした「桐壺」は、以後の物語史においては、ひとつには典型的な繁栄の場とする系譜を推定できそうであり、一方で、和歌世界を中心に『源氏物語』が正典化し、桐壺悲恋信仰が浸透してゆくなかで、「桐壺」は悲恋の局としての印象をより強めていったと思われる。これらについても、今後さらなる検討と考察を加えていきたい。

このようにあらためて物語をたどってみると、桐壺巻の「御局は桐壺なり」ばかりが突出しているようにさえ思われてくる。簡潔な短文がいかに強烈な印象を与え続けてきたか。それには『源氏物語』をとりまく諸事情も関与していよう。物語冒頭の衝撃と、五十四帖を読み通すことの困難さと。須磨返りならぬ桐壺返りすらめずらしくはない現代においては、制約をひきずる教科書や抜粋型テキストにみられる「桐壺」尊重傾向まである。そうした受けとめる側の事情は、時に物語の全貌をみえにくくしてしまう。「桐壺」は決して桐壺巻だけのものではないのである。続く帚木巻以降に見え隠れする「桐壺」「淑景舎」をあわせてみる時、「御局は桐壺なり」と紹介された空間の重さが明らかになり、それを描く物語のしたたかなまでの創造力が鮮やかに現出してくるのである。

注

(1) 『源氏物語』本文の引用は新日本古典文学全集（小学館）により、巻名と頁数を記す。他の作品も基本的には同全集により、違う場合はそれぞれの引用部に注を施して示すこととする。なお、一部表記を私に改めたところもある。
また、引用本文の重要な部分には私に傍線を施した。

(2) 尾州家河内本本文では「おほんさうし」である。池田亀鑑『源氏物語大成』（中央公論社）によればその他の異同はみられない。

(3) 池田亀鑑『源氏物語事典』（東京堂出版）に個々の用例と解説があり、全体の用例が知られる。増田繁夫「源氏物語の後宮―桐壺・藤壺・弘徽殿―」『源氏物語の鑑賞と基礎知識　1桐壺』（至文堂1998・10）は、それらを概観し史料にふれている。なお、増田氏にはそれ以前に「女御・更衣・御息所の呼称―源氏物語の後宮の背景―」山中裕編『平安時代の歴史と文学　文学編』（吉川弘文館　1981・11）「弘徽殿と藤壺―源氏物語の後宮―」（『国語と国文学』1984・11）などがあり、後宮について考察されている。

(4) これまでに引用した二例、次に引用する二例以外の用例をあげておく。「御宿直所」「宿直所」の使用者を【　】に記し、それぞれの用例を列挙してみる。

【光源氏】

＊穢らひ忌みたまひしもひとつに満ちぬる夜なれば、おぼつかなながらせたまふ御心わりなくて、内裏の御宿直所に参りたまひなどす。
夕顔　一八三

＊年も暮れぬ。内裏の宿直所におはしますに大輔の命婦参れり。
末摘花　二九八

＊朔日のほど過ぎて、今年、男踏歌あるべければ、例の所どころ遊びののしりたまふにもの騒がしけれど、さびしき所のあはれに思しやらるれば、七日の日の節会はてて夜に入りて御前よりまかでたまひけるを、御宿直所にやがてとまりたまひぬるやうにて、夜更かしておはしたり。　末摘花　三〇三

これらはいずれも、「桐壺」であるとみられる。

ちなみに他の人物に関わる「宿直所」もあげておく。

【頭中将】

＊中将、宿直所より、「これまづとぢつけさせたまへ」とて、おし包みておこせたるを、いかで取りつらむと心やまし。　紅葉賀　三四五

【髭黒大将】

＊宿直所にゐたまひて、日一日聞こえ暮らしたまふことは、「夜さりまかでさせたてまつりてん。かかるついでにと思し移るらん御宮仕なむやすからぬ」とのみ、同じことを責めきこえたまへど、御返りなし。　真木柱　三八三

【夕霧】

＊やうやう夜更けゆくほどに、いたうそらなやみして、「乱り心地いとたへがたうて、まかでん空もほとほとしうこそはべりぬべけれ。宿直所ゆづりたまひてんや」と中将に愁へたまふ。藤裏葉　四四〇

ただし、これは雲居雁との結婚を許された夕霧が、婉曲に寝所をもとめている例である。

【匂宮】

＊中宮の上の御局より御宿直所に出でたまふほどなり。紅梅　四九

＊里住みがちにおはしますを諫めきこえたまへば、いと苦しと思して、御宿直所に出でたまひて、御文書きて奉れたまへる、なごりもいたくうちながめておはしますに、中納言の君参りたまへり。　総角　二七六

＊雪にはかに降り乱れ、風などはげしければ、御遊びとくやみぬ。この宮の御宿直所に人々参りたまふ。　浮舟　一四七

匂宮の三例がどこになるのか、この時の「桐壺」がどうであったのかについては、明確ではない。

【薫】

＊中納言殿より、「昨夜、参らむと思たまへしかど、宮仕の労もしるしなげなる世に、思たまへ恨みてなむ。今宵は雑役もやと思うたまへれど、宿直所のはしたなげにはべりし乱り心地いとどやすからで、やすらはれはべる」と陸奥紙に追ひつぎ書きたまひて、　総角　二七四

前夜のことを婉曲に言っているところである。

(5)　すでに引用した桐壺巻と花宴巻の用例に加え、桐壺更衣をさす用例が二例ある。次のとおりである。

＊「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、「桐壺の更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしう」と　桐壺　四二

＊この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう「桐壺更衣の御腹の源氏の光る君こそ、…略…」　須磨　二一〇

(6)　清水好子「若菜上下巻の方法」『源氏物語の方法』（東大出版会　1980）。

(7)　注（6）論文を受け、若菜巻における「いま」「むかし」「いにしへ」を用いた過去と現在の対比について、かつて論じたことがあるので、あわせてご参照いただければ幸いである。「『源氏物語』若菜の巻の時間―その方法をめぐって―」（『物語研究』四号　1983・4）。

(8)　注（5）参照。

(9)　記録類の引用は、『江次第抄』が続々群書類従、『日本紀略』が国史大系（吉川弘文館）、『小右記』が大日本古記録（岩波書店）、『権記』は史料纂集（続群書類従刊行会）による。なお、旧字体を私に改めた部分がある。

(10)　村井康彦「内裏および公卿邸宅火災年表」『平安貴族の世界』（徳間書店　1968）

(11)　注（3）増田氏論文参照。

(12)　『本朝世紀』長保四年八月三日の条に「今夜東宮淑景舎女御卒去」（国史大系による）とある。

(13) 注（5）増田氏論文。
(14) 角田文衛『日本の後宮』学燈社。
(15) 『楽府詩集』「第六巻　郊廟歌辞六　唐五郊楽章」に「淑景遅遅和風習習」、柳宗元「迎長日賦」に「淑景初延　幽陽潛起」、杜甫「紫宸殿退朝口號詩」に「香飄合殿東風轉　花覆千宮淑景移」などがある。こうした記述が典拠となって、殿舎に「淑景舎」という名称がつけられたと考えられる。また、日本においても『本朝文粋』巻第十　詩序三　木」に紀納言として、紀長谷男の作「仲春釈　聴講禮記同賦桃始華」に、「颺綬彩於淑景」とある。
(16) 『狭衣物語』の引用は日本古典集成（新潮社）による。
(17) 『しのびね』の引用は中世王朝物語全集（笠間書院）による。
(18) 拙稿「引用」『中世王朝物語御伽草子事典』（勉誠出版　近刊）でふれた。
(19) 和歌の引用はすべて新編国歌大観（角川書店）により、本文中ふれている歌集および歌合もすべてそれによっている。
(20) 『風葉集』の詞書および作者表記は次のとおりである。
一〇七→『風葉集』六三八
きりつぼの更衣うせてのち、月のあかかりける夜、ふるさとをおぼしめしやらせ給ひてよませ給ひける　さかきの院の御歌
一一一→同　二三三
のわきだちたるゆふべ、きりつぼの更衣のははの許につかはさせ給ひける　源氏のさかきの院御歌
三〇一→同　二九九
きりつぼの更衣のははのもとに御つかひにてまかでたるに、風いとすずしく、草むらのむしのこゑごゑもよほしがほなれば　源氏のゆげひの命婦
(21) 『無名草子』の引用は日本古典集成（新潮社）による。
(22) 神野藤昭夫「散佚物語《後期》」『体系物語文学史　第三巻』有精堂　1983）、神野藤昭夫「〈付〉散佚物語事典―鎌倉時代物語編」（『体系物語文学史　第五巻』有精堂　1991）、三角洋一『物語の変貌』（若草書房　1996）、神野藤昭夫『散佚した物語と物語史』若草書房1998）など。
(23) 注（21）の諸文献参照。神野藤氏「散佚物語《後期》」によれば、「帝と淑景舎女御の間には一宮が誕生するが、女御は早く兵部卿宮と関係があったらしい。宮の亡きあと女御は宮を追慕し、宮の正妻かと推量される冷泉院女一宮は、一周忌に出家を遂げる。歌数からすると帝が主人公かと考えられるが、題号からは、宮との恋がかなわず、入内して皇子を生みつつ、宮を追慕する女御の人生の変転とその心情を主題化していたもの、とみることができる。『しのびね物語』との類似性に注目させられる物語である。」とされる。いま、「桐壺」を考える立場からすると、本文で述べたとおり「桐壺」の登場する『しのびね』との類似性という指摘は興味深い。もっとも、『しのびね』は「桐壺」であり、『浪のしめゆふ』の資料となる歌はいずれも「淑景舎」となっており、呼称の微妙な違いには、少し距離のある印象も抱かせられよう。注（22）三角氏著書所収「『浪のしめゆふ』小考」に詳しい考証があり、それによって成立時期はかなり追いつめられているが、「淑景舎」そのものをどうとらえたらよいのかについては、いまだ明らかではない。
(24) 注（22）の神野藤氏「〈付〉散佚物語事典―鎌倉時代物語編」によれば、「のちの女院が若い頃、一時小野に隠れ住むことがあるが、三条院はその行方を聞き出し再会する。後年、女院は小野の地を再訪し、昔を偲ぶ。女院が姿を消したのは、桐壺御息所の出仕と関係があるかも知れないが、その御息所は三条院の寵愛の衰えを嘆く。ほかに左大臣の娘に恋文をおくる関白、つれない女との逢瀬を嘆く按察大納言の存在や左大臣の遊宴歌などが知られるが、主筋との関係は不明。」とする。これは「淑景舎」ではなく「桐壺御息所」としており、やはり呼称の違いは気になるところである。